

CONTENTS

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談 第15回 ゲスト 桂 米朝さん●落語家
これ好きやさかい、これ残したいんや4
長官コラム 文化庁の抜穴9

連載	わがまちの文化振興条例③	
	気仙沼市文化芸術振興条例22
	ことばの探検⑥	
	中国ではゲルゲルゲル山口仲美・24
	著作権の保護とその例外③25
	いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート⑤	
	広島県立歴史博物館26
	全国発掘調査ホット情報③	
	壇の越遺跡埋蔵文化財発掘調査の成果と展望文化財部記念物課埋蔵文化財部門・27
	子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区	
	八女福島(福岡県八女市)28
	外来語の現状とその解決のために③	
	特色をもった外来語辞典にどういうものがありますか・・・甲斐睦朗29
	文化体験プログラム支援事業③	
	大阪府大阪市30
日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保持者編27		
千田堅吉(唐紙製作)31	
探訪 日本の世界遺産③		
法隆寺地域の仏教建造物32	
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法—文化財鑑賞の手引き—③		
梵鐘のみかた33	
平成15年春の叙勲、褒章受章者34	
平成14年度(第25回)文化庁舞台芸術創作奨励賞決定36	
平成14年度(第4回)文化庁優秀映画賞受賞作品37	
あなたのまちで伝統文化こども教室をはじめませんか38	
平成15年度 京都国立博物館夏期講座のご案内39	
「関西元氣文化圏」及び「文化カログマーク」について39	
イベント案内	東京国立博物館	
	新たな国民のたから 文化庁購入文化財展40
	奈良国立博物館	
	特別展 インド・マトゥラー彫刻展/パキスタン・ガンダーラ彫刻展	
	仏像誕生の地から奈良へ41
	東京国立近代美術館	
	地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画42
	京都国立近代美術館	
	横尾 by ヨコオ	
	描くことの悦楽/イメージの履歴と再生43
東京文化財研究所		
近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展44	

特集	文化庁提言	
	文化ボランティアで「橋」を架ける河合隼雄・10
	文化ボランティアの推進に向けて文化庁実践者アンケート調査結果の概要
	文化ボランティアに対する寄附促進のための工夫税制上の認定NPO法人制度の活用 ...三曲合奏研究グループ・12
	NPO法人に対する寄附促進のための工夫寄稿
	文化ボランティア活動の環境整備に向けて政策課・18
	文化ボランティア活動の環境整備に向けて寄稿
	NPO法人に対する寄附促進のための工夫寄稿
	文化ボランティア活動の環境整備に向けて寄稿
	文化ボランティア活動の環境整備に向けて寄稿

今月の表紙
平成15年5月23日
【文化芸術懇談会(東海甲信ブロック)】
会場:名張市総合福祉センターふれあい(三重県)

新国立劇場スポットライト45
7月の国立劇場46
芸術文化振興基金ニュース47
題字デザイン 桑山弥三郎

これ好きやさかい、これ残したいんや

触れる

河合 大阪には寄席がなくなったとのことです。

米朝 国立演芸場が東京にあるように、こっち（大阪）にもつくれというて、いろいろ運動したりした人もあったんですけどね。「どう思いますか」と言うから、私は「誰が出るねん」と言った。あんな割り（出演料）で誰が喜んで……。こっちは吉本の専属とか、松竹の専属というのがありますからね、そういうのが出なったら客が来ません。

河合 難しい問題ですね。

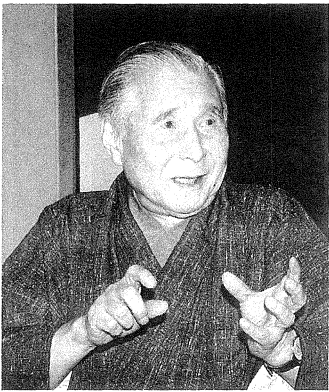
米朝 昔は気楽に、ヒョイツと風呂の帰りにちよいとどぞいでですな、自分の聞きたいもんだけ聞いたら帰ってしまうというような雰囲気のお客さんですから、今みたいにトップから最後まで聞か



だらいかんというような雰囲気とは違いましたよ。入場料も安かったです。

河合 すべてのが変わってしまいましたからね。

米朝 映画の常設館ですら、なかなか維持ににくい。やっぱりテレビの影響やと思いますけどね。



かつら・べいちょう 落語家。満州大連出身。昭和22年に四代目桂米団治に入門し、3代目桂米朝となる。ほどなく大阪北新地で初舞台（演目は『高津の富』）。上方落語の重鎮として幅広く活躍し、第13回ゴールデンアロー賞芸能賞受賞（昭和50年）、芸術選奨文部大臣賞受賞（昭和55年）、紫綬褒章受章（昭和62年）等、高い評価を受ける。平成3年には、生まれ故郷の大連で、「米朝独演会」を行う。平成8年、重要無形文化財保持者『人間国宝』に認定。平成14年、文化功労者に選ばれる。代表的な演目に、『地獄八景亡者戯』等がある。

河合 私は何とかみんな生のものに触れるように、劇場へ行ったり映画館へ行ったりするような運動を起しているのですが。

米朝 ほんとに生に触れなさいと。映画でもテレビで見ると映画館とは違いますが。

河合 私は、丹波の篠山で育ちましたから、大阪なんてめったに出てきへんのです。ところが、うちのおやじが落語のレコードを持っていて、春団治いうんですか、僕は今でも覚えてますもん、子どものときに聞いたものを。

米朝 何しろSPですから、短いけども。

河合 『道具屋』ちゅう唄があります。あれで「道具屋、道具屋」というところで、盤を裏返さないかんのですよ（笑）。

米朝 そこで裏返すのがまた思い出で。

河合 思い出です。そこで裏返すと（笑）。

米朝 『阿弥陀池』とかね。子ども心に台詞がわけわからんけど、覚えてるわけですね。

河合 「天は紅で染めて」とかいうのがあ

るんですよ。全然わけわからんです。それでもちゃんと覚えてます。大きくなつてから、（あ、この言葉や）と思うて感激しましたけども。

米朝 ほんとにそうです。わかってもわからへんでも残しておかないかんと思つて、私、いまだにわからんけども、変えずにそのまま片意地に残してある言葉もあるんです。前後の関係で大体わかつてもらえますさかいね。これを変えたらこの言葉はもうなくなってしまう気がして、あえて残しようなものもあるんです。

河合 それでも言い方にもよるけど、落語は隆盛といえは隆盛で。

米朝 こないに唄家がぎょうさん二〇〇人近くもできてくるように、とても関西は考えられませんでした。ちょっと多過ぎて困ってますのや。

河合 それだけやりたい人も出ています。

米朝 それと皆、唄家を土台にしてテレビの人気者になったり、いろんなことをやりだしたりしてる人は随分おりますからね。

河合 いろいろな意味で唄いうものが芸

の土台になってんですね。
米朝 自分では気がつかなくても、それをやってきたことが、今、役者やつていようが、司会者やつていようが、この基礎があるからや、と言いたいような人がたくさんおられます。

残す

河合 今、関西の落語界も随分栄えていらつしやるというお話がありました。戦後、戦争から帰られて、関西の落語界が一度滅びかかっていた時期があつたと伺っています。

米朝 私の師匠の米団治は昭和二六年の秋に亡くなり、二八年に春団治師匠が亡くなったときに、新聞に「上方落語が滅んだ」と書かれました。亡くなった六代目松鶴と二人で「むしろどないなるのや。滅んでもうたんやが」笑。その頃、私は、「これ好きやさかい、これ残したいんや」と言うた記憶があります。いろいろ人を集めたら一〇人位古い人がいて、若いのが五、六人入ってきたという状態でした。私はいつも言いまんのや。「民間放送

というものができたんで、私は食べるようになったんや」と。テレビで我々が仕事が終わってきたら、何か新しい企画なんか立てたら、古い連中さんは、あんまりわかつてくれないから、若い連中のほうが使いやすい。出演料が安いわ、心安う使えるわ、文句言わへんわで、新しい企画物なんか、言うたらず理解できるといふようなところがありました。ね。どんどん使ってもらうようになり、生き延びたんです。

その間ずつと落語は、いろんなところを利用して、どこでも「やらしてくれ」と言つて、二〇人でも客が集まったら、ああもう喜んで行くというふうな調子でした。

やつぱり一番悪い条件のときに入ったんがよかつたかもわかりません。

私は、初めから残したいというねらいもあつたんで、誰もやらんような滅びかけてるようなものを特に取り上げて、知つてる人に聞きに行つたり、いろいろしたおかげで、だいぶ残せました。

河合 古いものは書いたものがあつたん

昭和五〇年ぐらゐから住み込みの弟子とつたのは私とこぐらゐになつてしまいました。うちだけはそれが条件みたいにしてつてました。そうすると、四六時中その世界におりますさかいね。勉強する気なら、本でも、レコードでも、テープでもうちにありますからね。あんなにして三年間内弟子に置いとくと、皆どつかええとこか、使えるところがあります。

河合 それを見つけるのがまた師匠です。米朝 私の師匠のところへ私が内弟子でおつた時分なんか、師匠が食いかねてまんのやさかいな(笑)。しかも、弟子が仕事とつてこんならんとつていふやうな。

復活

米朝 落語やつてるうちに落語以外にも、いろんな珍しいものがあるのがだんだんわかつてきて、俄とか、軽口というよくな昔の漫才みたいなんもんですけど、なかなか面白いものがあるなと思つたり、錦影絵なんて珍しいものを見つけてまして、あれはほんとによつて残しておいたことや

と思うねん。

河合 落語はそういうふうにいる研究されて、古いのも復活してこられるでしょう。やつぱり古いのも、今、ピツタリみんなが喜ぶのと、なかなかうまくいかんのとあります。

米朝 それはありますけど、お客さんにもよります。聞いたこともないような事を喜んで聞きに来るような人は、向こうから勉強して聞こうという気があると、わかつてもらい方が違いまんのやなあ。与えられるのを待つてる人では、ちよつと通じないことがある。

しかしそういうふうなお客が昔は東京には多かつたんで、こつちには少なかつたんですけど、近ごろはそうでもおまへん。こつちにかつてそういうお客さんが増えてきました。あんまり大きいところやると、落語も考えなあきまへん。

河合 やつぱり寄席の小さいところでやるのがええけど、そうすると入場料がどうなるとか、みんなお互いの関係ですね。

米朝 先生の講演でも同じこつちやと思つています。

ですか。

米朝 古い八〇代の人ところに聞きに行つたりして。お稽古にも行つたし、また、自分はやらんけども、聞き覚えてるというよくな、断片的に覚えてるようなところをつなぎ合わせて復活した事もあつた。

そこへ昭和三〇年代に入つたところに、若い我々に弟子入りしてくるやつができてきて、へえらいことになつたもんやな(笑)。

継ぐ

河合 弟子を育てるということは随分努力というか、いろいろ工夫とかされましたですか。

米朝 あんな時代に「なりたいたい」というて来る連中は、やつぱりちよつと変わつてました。やつぱり苦労は当たり前やと思つてるし、食つていけないのは当然やと思つてるし。仕込みがいはありましたね。

河合 そのころはまだ住み込みやつたんですか。

米朝 住み込みもありましたけども、

河合 やつぱり一〇〇〇人入ると、三〇人と全然違います。仕方違いますし。ただ、困るのは、断りなしに話をしたのをそのまま活字にされたら、あれはゆううつですな。

米朝 断りなしはいけませんな。

河合 それは事前に聞いてつたら違ひますけども、やつぱりその場の話をしてるわけですよ。そのときに思いつくことがあるし、それからサーブミス精神が出てくるんです。活字に出できたらね、何でこんなバカなことを言うとのや、となるんですよ。

米朝 いや、ほんまに。その会場における、その時点における、そのお客さんにおけるという、条件が皆違ひますさかいな。

河合 落語の場合は、一応筆記とかちゃんと残しておられますよな。

米朝 見て手入れたら、あるいは「今朝えらい大きな事故が起こりました」というのをわざと全集なんかに残してあるのもあるんです。

河合 なるほど。枕にね。

関西元氣文化圏

河合 今度、関西の文化を盛り上げようと言っているんですけど、いいアイデアありませんか。

米朝 一五年ぐらい前に船場を何とかする会というのがありまして。昔のような船場にしたいというのやけど、それは無理ですわ。だから、アメリカ村が（米朝）できるのもええやないかと思いなさいと私は言うたんです。

河合 何かするときに、昔のままに戻せというのはいくらでもなんです。昔の心を生かすという考えで、どういうふうにするの心を継承して生かすかと思つたらいいと思うんです。

米朝 御堂筋があんなに大きくなる前のことかと思うんですがね、東側と西側と家賃が違い、西側のほうが高かったんです。何でやというたら、西側のほうが先、夜が明けるんです（笑）。そやさかい西側のほうが先に店開けて、品物並べて商売できる。今度は夕方になると、東側は西日が当たって、魚なんか腐るといふんだ。

河合 関西のほうでも芸術祭を開催する予定で、主催公演では上方の大衆芸能の大御所の皆さん出ていただいで。絶対ばくも出席せんといかん、そういうふうに関西を守り立てないと思つて、いろいろ考えてるんです。

米朝 ただね、心配してるのは皆、年寄りで（笑）。

河合 落語なんかも今までは関東の落語家と関西の落語家を同じ物差しではかつて、どっちが上かみたいなきことをやってたんですけども、ちよつと違つるところがありますから、関西のこの人、関東のこの人ということが出せるようにしたいですね。

最近では関西の方でも賞をお取りになっていますが、どうしても賞も、関東のほうにどんどん偏つていくものですか。

米朝 批評家、審査員が東京の人が多い。それとやっぱり人口が違いますわ。

河合 京阪神が何か一つのかたまりになる考え方を持っていないといけませんね。みんなが関西全体で動くぐらいの感じを持つていたら面白いと思うんです。

す。そうでないと、もともとの人口が多いところは強いですよ。

米朝 神戸なんか神戸独特の雰囲気があったんですけど、このごろちよつと特色が薄れたような気もせんでもない。神戸を動かすんだ有名人がおりましたから。大阪でも、東京へ出てこいつたつて、「いや、行かん」という人が何人もおりました。

生かす

河合 文化功労者に去年おなりいただいたて……。

米朝 思いもよらんことでした。落語家から文化功労者が出たということ。

河合 長官になってから、いろいろなジャンルに日が当たらんといかんじやないかと言つていますが、すべてが全部変わつていくわけだから、変わつていく中で文化を継承してまた生かしていかないといいので、なかなか大変です。

米朝 二人おつたら残ると私は思いました。佐渡の人形劇というのが佐渡にあります。あれなんかも二人、「これは残

文化人の本音

河合隼雄文化庁長官対談

さなにかん」いうて頑張つてる人がおつたんです。

河合 今まだ実際に寄席に出られるわけでしょう。それこそ体力、氣力要る仕事だから大変でしょうね。

米朝 独演会で昔は三席ぐらいやつたんですけどね。昔は狭いところでやつてましたからなあ。独演会いうたらほんとに四席ぐらいやる人ありました。二席ぐらいで何が独演会やちゅうなもんや。河合 独演会やないよ。

米朝 円生師匠という人は、七〇幾つになつてから『牡丹灯籠』やとかあいう長いものを一時間こぼれるぐらいやるんです。んで、あと短いものをちよつとやる。これは私は構わんと思うんですけどね、短い方がいいなもん、二、三〇分の斬を二つ並べて独演会何ぬかしてんのか。私は三つやるようにしてたんですけど、ほんならもう近年ちよつとそれがしんどくなつて、独演会やりません。酒の方も慎んでます。けど、先生と一週飲

みたいなあ。

河合 今度は酔つ払つてやりましょ（笑）。ほんとに今日はありがとうございました。

（注1）LPレコードに対して演奏時間が短い円盤レコード。

（注2）かつてアメリカから輸入した小物を売る雑貨屋が集まっていたことから名付けられた。

（注3）平成十五年一月二五日
上方落語出演者 桂米朝、桂春団治、桂文枝、露の五郎

一〇一歳の祝

文化庁の抜穴 河合隼雄

中川牧三先生の一〇一歳の誕生祝のパーティーに出席した。日本のオペラ界の草分けで交友も広い方なので、音楽界、財界、文化人が四〇〇人以上も集まって盛大な会であった。中川牧三先生と言つても、一〇〇年もの間なので知らない人もいるだろう。大作曲家で指揮者の近衛秀麿と渡欧、日独伊三国同盟時代に、ドイツでは斎藤秀雄、イタリアでは藤原義江らと共に、音楽を学び、日本のクラシック音楽の発展につくした方である。

上海で当時の日本軍の文化振興面を担当し、水準の高い上海交響楽団の指揮者として、まったく無名に近かった朝比奈隆を抜擢し、その後の、彼の指揮者としての成長に、大きい寄与をした。関西では、朝比奈隆を唯一、「クン」づけで呼べる人などと、中川先生のことを評していた。

一〇一歳でまだまだお元氣な姿に接し、その元氣を「関西元氣文化圏」にいただきたいと思つた。

◆長官対談
 「文化人の本音」河合肇雄文化庁長官対談
 堀田 力 弁護士・さわやか福祉財団理事長
 「長官」ラム文化庁の抜穴

◆特集◆
文化と科学技術の融合
 ～文化創造最前線～

【巻頭言】
 文化庁
 【事例紹介】
 凸版印刷株式会社
 東京国立博物館
 (財)文化財建造物保存技術協会
 独立行政法人奈良文化財研究所

◆連載◆
 「わがまちの文化振興条例」
 愛知県春日井市
 「ことばの探検」……………山口仲美 埼玉大学教授
 【著作権の保護とその例外】
 「いきいきミュージアム」美術館・博物館事業レポート」
 萬哲五郎記念美術館(右手県)
 【全国発掘調査ホット情報】
 前田茶臼山遺跡(山口県)
 「子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区」
 秋市堀内・平安古(ひや)浜崎地区(山口県)
 【外来語の現状とその解決のために】
 ………………甲斐陸朗国立国語研究所所長
 【文化体験プログラム支援事業】
 足利文化体験プログラム事業
 【日本の伝統美と技を守る人々】
 竹釘製作・石塚芳治
 【探訪】日本の世界遺産
 白神山
 【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】
 焼き物の釉薬とその技法
 ◆文化庁ニュース◆
 文化財の新指定

文化庁月報 6月号 (通巻417)

平成15年6月25日印刷・発行
 編集—文化庁
 〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
 発行—株式会社 **ぎょうせい**
 本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
 本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
 電話 編集 03(3571)2126
 販売 03(5349)6666
 URL: <http://www.gyousei.co.jp>
 印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 **【本体514円】** 送料76円
 年間購読料6,480円
 本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
 (株)ぎょうせい営業部広告課
 電話03(5349)6657(ダイヤルイン)
 ©2003 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。

編集後記

文化庁では今、これまでの「経済力」だけでなく「文化力」によって日本を元気にしようとして取り組んでいます。日本の文化といえば、独特の自然を味わうところに端を発しているものが多いように感じます。想像してみてください。身近なところでの「匠」然り、「真」然り、「性」然り、ですよね？
 じっくりと自然を味わう技に長

けている皆さま、日本独特の気候がもたらす雨の季節を、いかがお過ごしでしょうか。おすめは、文化庁月報6月号を片手に、雨の音に耳を傾けて心静かに梅雨を味わう。晴れたころには元気でいっばいになって、外へ出て、文化ボランティアでもしてみようかな、という気分になつていっているのではないのでしょうか？
 (K・K)

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
<http://www.bunka.go.jp>